



バイト帰り、一緒に初めて
入ったラブホテルは、
淫靡な照明と、照り返す大理石、
ピンク色の壁に巨大なベッド。
高〇生が来るにはあまりに
大人な気分がした。



ここでセックスを…寧々さんと初めてセックスをするのか…。
俺は、付き合ったときからそれを夢みていたが、
現実にやってくるのがいささか信じられない…。

「〇〇くん、大丈夫？なんか緊張するね。」
ああ…寧々さんの甘い声…。
「私も…ドキドキしてる…。」
俺たちはカバンを置き、しばらく時間が止まる。
心臓の音が聞こえてしまいそうだ。

「じゃあ…私も入っちゃおうかな。」

「え…ちょっ…寧々さん!？」

浴室のドアが開く。

俺はあわてて股間をタオルで押さえる。
そして夢にまで見た裸の寧々さんが…!!

「じゃあ…その…シャワー…。」

「…あ…うん。そうだね。」

「あ…寧々さん先でいいよ。」

「ううん、あなたが先でいいよ。」

「私、お母さんに連絡するの
忘れちゃったから、ね?」

「そ…そうなの。」

俺は寧々さんに促されるまま、先に風呂に入る。



チンポはギンギンに勃起し、いまだにこの状況が信じられない…。

本当にセックスするのだろうか…。

俺は軽くシャワーを浴び、お湯を貯めて湯船に浸かった。

…と、

「○○くん、どう? お湯加減は? 気持ちいい?」

ドア越しに、寧々さんの声が。

俺は突然のことに驚くも、なんとか返事をする。

「う…うん、気持ちいいよ。」

寧々さんはバスタオルを体に巻いていた。
そ…そうだね…いきなり裸なんてないよね……。



だが、この布の下には一切の隔たりはないのだ！t
その証拠に、ツンと張った乳首と、黒々した茂みがうっすら見える…！！
俺はそれを確認した瞬間勃起がMAXになり、あわてて膨れ上がる
股間のタオルを押さえた。





俺は、寧々さんに股間を見られぬよう、

肩を掴んでキスをしはじめた。

「あっ…〇〇くんっ…んっ…」

寧々さんは驚いたようだが、受け入れてくれた。

柔らかな唇と、抱き寄せたときに触れた全身。

寧々さんの体温をここまでじかに感じたことはなかった…。

しばらくキスをしていると、勃起したチンポが

どうしても寧々さんに触れてしまう。

目をそらす意味がなかった。

「あっ…」

「ふふっ…こうふんしてるの？」

「ね…寧々さん…」

「私もね…ずっとドキドキしてるよ。」

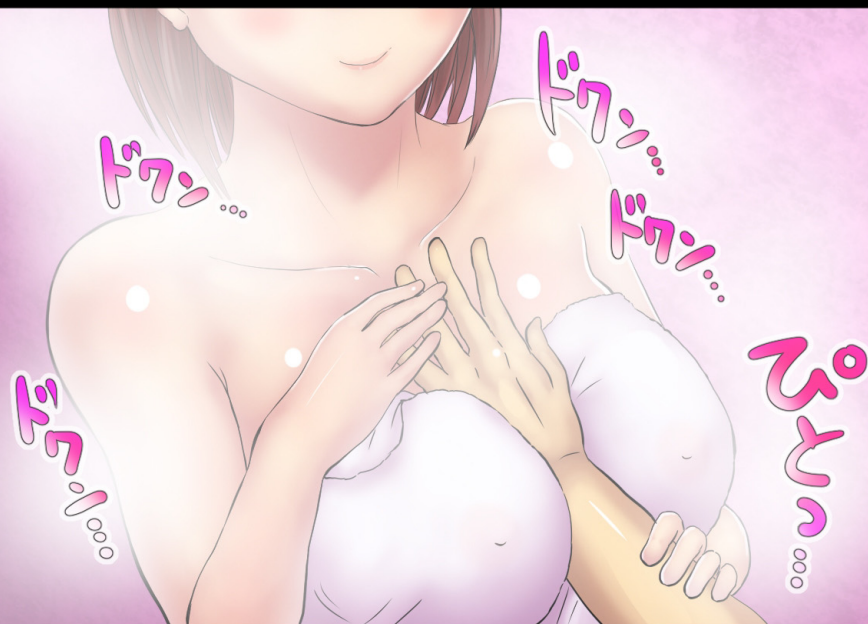
寧々さんが湯船に足を入れる。

「ふふっ、こうして、二人でお風呂はいるの、熱海の時以来だね。

あの時は楽しかったなあ。あっ、もちろん、今もだよ？」

寧々さんにタオル越しとはいえ勃起したチンポを見られるのは
さすがに恥ずかしかった。

熱海ときは、驚いて逆に勃たなかったが、今は状況が状況だ。



寧々さんが俺の手を胸に導く。

「聞こえる？私の心臓の音…」

どくん、どくんと鼓動が
手のひらに伝わった。

って…おっぱい…おっぱい！

「寧々さん…まずいよ…
俺…が…我慢が…」

「…うん…」



「寧々さん…」「んっ」

俺は寧々さんの後頭部に手をやって、キスしながらそのまま、俺のほうに引き寄せる。

「んっ…」「あっ…」 寧々さんの舌が、俺の唇を割り入ってくる。

「寧々さっ…!」「んんっ…はあっ…」

キスはリフレインキスどまりなので、ディープキスは初めてだ。ああ…ついに…。

バスタオルで急いで体を拭き、たたんであったバスローブを羽織った。
部屋に戻ったが、俺はその後どうしてよいか判断が出来ず、とりあえず
ベッドの隅に座った。

このあと、やることはセックスだけなのだ…!!

勃起がおさまらないまま、寧々さんを待つ。
しばらくすると風呂の扉の開く音がして…。

寧々さんが顔を赤らめて、
俺の勃起したタオル越しのチンポを見る。

「わっ…寧々さんっ!!」

「あっ…ごめんね…その…

見ようと思って見たんじゃ」

「お…俺、先に上がるよ!」

俺は必死に湯船から上がった。

「はあっ…いいお湯だったなあ
気持ちよかった… ね?」

寧々さんもバスローブをまとって部屋に現れた。

「寧々さん」

寧々さんの体を抱いて、バスローブ越しに触ると、やはり下着はつけていないようだ。

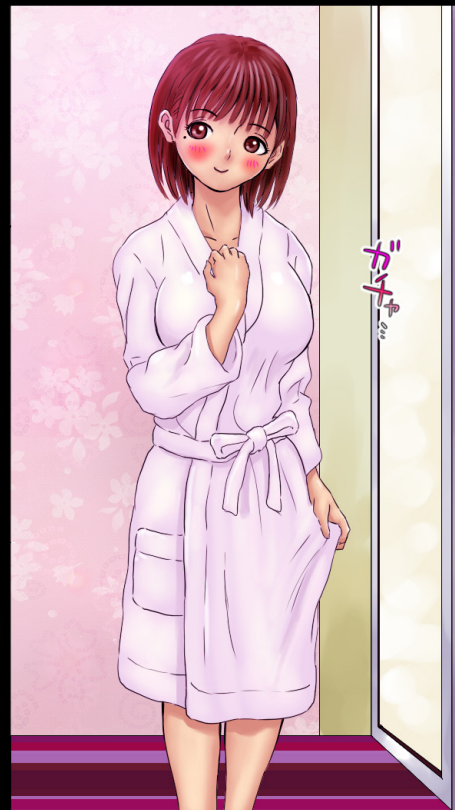
俺はギンギンに勃起したチンポを抑えかねている。手をローブの紐に回し、ゆっくりとほどく。



「ドキドキするね」

寧々さんが俺の横に座る。

緊張でひざが震える。寧々さんが気づいて俺のひざに手を置いてくれる。
俺はいつものように頭を撫でて、寧々さんにキスをする。

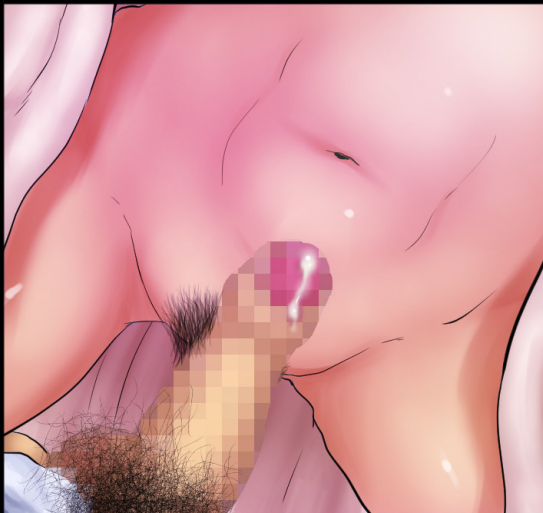


「あっ…。」

はらっ…

てんこ





キスが続く。

「んっ…はあっ…んっ…」

「あっ…」

俺の勃起したチンポが、
寧々さんの陰毛と、腹部に当たった。
また、ピクンと血液が流れこみ、
チンポをさらに硬くさせている。



ローブがはだけ、一気に寧々さんの
白い裸体があらわになった。

巨乳、いや、爆乳レベルの乳が
垂れ下がり、少し肉のついたお腹、
下腹部には黒い茂み…。

俺のチンポは、射精でもないのに
tギンギンビクビクとぜん動した。



「あっ…大丈夫…苦しくない？」

「寧々さん…！」

「ふふ…」

「入りたい…寧々さん」

「んー？」

「寧々さんの中に…入りたいよ」

「ふふっ、嬉しいな、そう言ってもらえて」

「じゃあ…えっと…あ…。あつたあつた。」

寧々さんは俺から離れ、ベッドの枕元にある
コンドームに手を掛ける。

寧々さんはコンドームの袋を手に持ち、
破いて中身を取り出す。

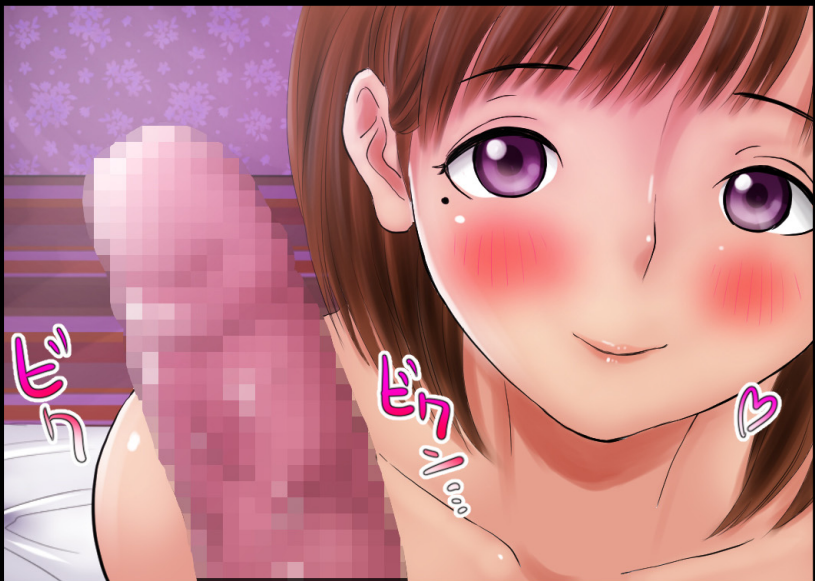




「あっ…ごめんね…
どうする？今出したい？」
「い…いや…我慢するよ…」



「あはっ…ちょっと皮がむってる…
舐めていい？」
「あっ…！」
「んっ…ちゅばっ…んんっ…
これがあなたの味…」
「で…でるっ…」



「これで…いいのかな？
痛くない？大丈夫？」
「…大丈夫です」
「…じゃあ…ね？」
「寧々さん…」
「優しく…ね？」



ついに、ついにその時が来た。

俺は、寧々さんの豊満な裸体を眼中に入れながらも、意識は完全に俺と寧々さんの下半身に集中していた。

「もうちょっと…下…」

寧々さんが、俺のチンポを軽く持って、導く。



ゴム越しの亀頭の先が暖かい感触に触れる。

「あっ…！」

くぶり、と、亀頭が飲み込まれた。

「あっ」寧々さんが声を上げる。

「入った…」

「寧々さん…大丈夫？」

「うん…ゆっくり…入ってきて…」

チンポがどんどん寧々さんの暖かさに飲まれてゆく。

これが…寧々さんの…膣内っ…！

快感と感動と興奮が一度に押し寄せている。



俺は、チンポを前に進める。なかなか進まなかったのが、ぐっ、と進んだかと思うと、

「痛っ…!!」
「あっ…寧々さん…大丈夫？」

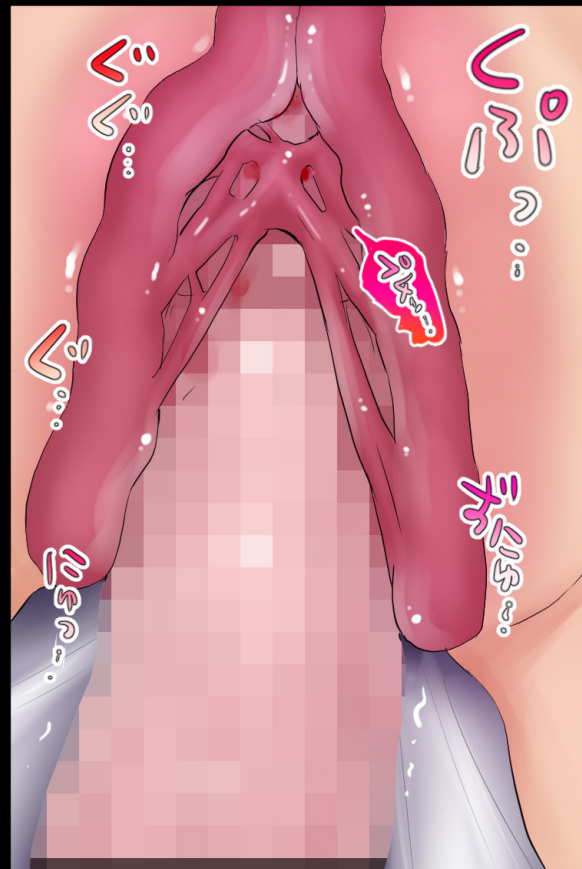
「大丈夫…大丈夫だから」



「？」
途中でチンポが止まる。
「あっ…」

これが…処女膜！？

「大丈夫だから…。〇〇くん…。もっと…奥まで…」



プレイ下さりありがとうございました！

続きは製品版でお楽しみください！

